病院図書館　2005；25(1･2)：21-23

特集２　総会・事例報告会（第107回研修会）

星ヶ丘厚生年金病院図書室の業務分析

中村 友紀

Ⅰ．調査目的

現在当院図書室には専任職員が２名配属されていますが（2004年３月25日現在）、2005年度より１人体制、それも卒後１年とまだ経験の浅い職員１名のみとなります。これにともない、図書館業務の効率化を図り、業務配分を再考する必要があります。そこでまず、１年間の業務量調査を行うことによって、今後の図書館運営や業務指針を考える際の参考データを収集することにしました。

Ⅱ．調査内容

調査対象期間は2004年１月から12月の１年間です。この調査の主な内容は「図書室の行った業務を数値化し、全体量と各業務別の業務量を把握する」「導入データベース、および所蔵資料の利用調査を併せて行い、利用動向を知る」「年間の業務スケジュールを再確認する」の３点です。

Ⅲ．当院図書室の概要

調査結果について話をする前に、当院図書室の概要について簡単に説明したいと思います。総面積は104平方メートル、閲覧席は11席です。但し、この広さは図書室と隣の書庫のみの広さで、この他病院新館地下１階と第２診療棟地下２階にそれぞれ図書室の電動書庫があり、1986年から1998年までの製本雑誌、寄贈雑誌などを保管しています。雑誌は基本的に最新５年分のみを図書室隣の書庫で保管しており、古いもの

から順次地下書庫の方に移しています。地下書庫はあと50年分は収納できるくらいのスペースがありますので、今のところ廃棄基準は特に定めていません。

コピー機については長年、コピー帳に記入してコピーしてもらう方式を取っていました。しかし、図書室が実質的に24時間365日利用できる体制になっていることもあり、コピー帳に記入されない不明コピーが約６割と非常に多く、特に職員が不在である休日に不明コピーが多いことから、管理の強化という意味で、新年度よりコピー機をプリペイドカード式に変えることになりました。

図書の分類については日本十進分類法を採用しています。それから、蔵書の管理にはサンメディアのパッケージソフト「司書アシスト」を利用しています。従来は、新着雑誌と単行本の管理のみ行っていましたが、昨年11月から文献の相互貸借の管理にも利用するようになりました。おかげで、一部の統計作業が以前に比べて格段に楽になりました。

蔵書は、単行本と製本雑誌が合わせて約20,000冊。2004年度の購入雑誌が、和雑誌94誌、

なかむら　ゆき：星ヶ丘厚生年金病院　図書室

洋雑誌72誌の計166誌となっています。また、契約電子ツールとして現在、医中誌 Web、JDream、the cochrane library、今日の診療プレミアム DVD-ROM 版などが利用できます。平成17年度からはこれに、一時中断していたUpToDate が再び加わる予定です。

資料購入予算は1,000万円、文献相互貸借の費用や電子ツールのライセンス契約料などに300万円、合計1,300万円が当院図書室の年間予算となっています。

Ⅳ. 調査結果

それでは、本題に入ります。まず、図書・雑誌の受入と管理に関する調査結果です。昨年1年間の単行本受入冊数は、和書87冊、洋書14冊の計101件でした。これに対し、和洋雑誌受入件数は、188誌2,697件、単行本受入冊数の約27倍と非常に多く、病院図書館は雑誌を取り扱う量が圧倒的に多いことを再確認しました。寄贈年報・寄贈雑誌の受入誌数は92誌でした。また、当院図書室では月初めに1回、前月に受け入れた雑誌の特集記事一覧を作成して図書室入口に掲示するとともに、院内HPにアップしていますが、この特集記事の件数が1,580件でした。また、当院で読めるオンラインジャーナルは無料で閲覧できるもののみですが、その管理とPubMed LinkOut の設定が、2004年では合わせて185誌となっています。雑誌のクレーム処理は和雑誌7件、洋雑誌50件の合計57件でした。特に洋雑誌に言えることですが、最近梱包が非常に粗末な雑誌が多いように思います。

昨年は和雑誌163冊、洋雑誌231冊、計414冊を製本しました。現在は巻号が揃っているものは、一部を除いて基本的に全て製本していますが、今後は学術雑誌というより読み物的要素の強いものなどは製本対象から外すなど、製本するものとしないものに分類する基準を定めることも検討しています。

また、職場で手元に置いて適時利用したいという各部署の要望があることから、一部の図書の長期貸出を行っています。通常の貸出と異なり、年単位での貸出になりますので、チェック作業はかなり大変ですが、各部署に図書委員が1人ずついるため、他部署との連携を深め、協力し合うという点において図書室にとってもメリットがあります。

それから、昨年9月に、蔵書約11,000冊、重量にして20トン超の大規模な廃棄を行いました。単行本も製本雑誌も1986年以前のものは一部を除いて全て廃棄しています。ですので、以前配布された CD-ROM 版の目録とは所蔵状況が大幅に変わっております。当院へ相互貸借依頼をされる際はご注意ください。廃棄するまでのチェック業務・整理業務にも骨をおりましたが、廃棄にともなって図書の配架場所が大幅に変わったため、大規模な書庫点検・移動・整備を余儀なくされました。2人がかりで約1カ月間もの時間を要した、大変な作業でした。また、廃棄に関わる作業が全て終了した後、利用者向けの所蔵雑誌目録を作り直しました。

次に利用サービスに関する調査結果についてです。まず貸出・閲覧・複写冊数についてですが、この2,628冊という数字は実測値ではありません。当院では昨年10月から半年間に渡って利用調査を実施しました。10月から12月の調査結果の平均値219件に12カ月をかけて算出したのが、年間2,628件という数値です。ただ、この数字は実際の利用状況とはかなりかけ離れています。前述のように当院図書室は職員が24時間自由に利用できる体制をとっているため、正確な利用状況を把握することができません。現場での感触として、調査結果の3倍が最も実態に近いのではないかと感じ、利用冊数の参考数値として、約8,000冊という数字も併記しておきます。

文献相互貸借件数は、院外への依頼件数が1,157件、院外からの依頼件数が75件でした。院外への依頼についてはほとんどを業者に依頼しており、2004年は全体の95％をサンメディアに依頼しています。また、当院では相互貸借に

関わる費用は全て公費負担となっており、2004年は約102万円の費用がかかりました。院外からの依頼は、廃棄作業の関係で数カ月間受入を中断していたこともあり、昨年に比べるとかなり減っています。

同様に、レファレンス相談・調査件数も正確な数値を出すことはできませんし、日によって件数が多い日も少ない日もありますが、おおよそ1日あたり2～3件程度の相談が寄せられておりますので、勤務日数に2.5をかけて625件をレファレンス件数の参考数値としています。

当院図書室では書店の方々に協力をお願いし、年間を通して図書の個人購入の斡旋を行っています。発注の翌日にはもう本が届いているということも珍しくなく、特に研修医にはよく利用されています。また春には初めての試みとして、新しく入ってきた研修医向けのブックフェアを開催しました。なかなか好評で、次年度も開催を検討したいと思っています。それから、6月に院内向けの図書室ホームページを立ち上げました。新着図書案内・新着雑誌特集記事リスト・図書室からのお知らせなどのコンテンツを、月1回のペースで更新しています。

この他、ガイダンス、PubMedワークショップ、看護学校授業、各種個人指導などの利用指導・利用教育関連業務、学術研究業績の収集・データベース化などの業務を図書室で行っています。また、パソコン・プリンタなどの機器類のメンテナンスや、消耗品の管理業務も多数あります。

V. 考察

こうして業務量を数値化して見てみると、1人で行う業務量としては多いということを感じます。しかし、同様の調査・分析を行った文献が見つからず、比較・検討をすることができませんでした。また、病院図書館では公共図書館や大学図書館とは異なり、雑誌に関する業務の割合が非常に高いことを再確認しました。それから、研修医に関わる業務が増加しています。先程触れた図書購入斡旋やブックフェアに関してもそうですが、当院では研修医の相互貸借依頼件数が、2003年の129件から、2004年は369件に激増しています。全体に占める割合でも、研修医の相互貸借依頼は約13%から32%と大幅に増えています。次年度は研修医の数が10名から16名に増えるため、研修医に関わる業務は今後さらに増加するものと予測されます。

なお当院では今年1月から、近隣の開業医への登録制情報提供サービスを開始しています。2月末現在で25名の登録があり、電話での問い合わせや雑誌バックナンバーの閲覧希望など、徐々に利用され始めています。今後は広報も含め、こうしたサービスの比重が増してくるのではないかと思われます。

VI. 結びにかえて

業務量を調査し、数値化することは、効率的な業務の遂行や年間スケジュールの確認、利用者ニーズの把握において意義がありました。また、図書館業務について、利用者や管理者の理解と協力を得る、という点においても大きな意味があると思われます。ただ、こうした調査や統計作業には多大な時間と労力を要する一方で、利用件数やレファレンス件数など一部の業務については、現管理体制では正確な把握は不可能です。また、1人職場であることが多い病院図書館でこういった時間も労力もかかる調査を行うことはなかなか困難なためか、比較対象となる資料がなく、業務量について客観的な評価をするのが難しいのが難点です。しかし、卒後1年と知識も経験もまだまだ足りない私にとって、図書館業務やその業務量を把握するにはよい機会となりました。今後も必要に応じてデータを集積し、今後の図書館活動に生かしたいと思います。

(本稿は3月25日の近畿病院図書室協議会第107回研修会において発表したものに加筆したものである)